



NEWS LETTER

February 2018 Number. 8

ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表 岡室 美奈子

演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は2009年度に、文部科学省から共同利用・共同研究拠点として認定されました。2014年度に再認定を受けてからは、当館所蔵の未発表資料の研究に基づく共同研究事業を進める活動を推進しています。また2016年度からは文部科学省の補助金「特色ある共同研究拠点の整備推進事業 機能強化支援」を得て新たな事業も進めています。

本年度は各共同研究チームが研究期間の成果をまとめる2年目に相当し、各チームは専門的な考証に基づく詳細な資料目録の作成を進めながら、旺盛に成果発表を行いました。テーマ研究「坪内逍遙・坪内土行資料の基礎的調査研究」は、これまで蓄積してきた坪内逍遙宛書簡の考察や膨大な坪内土行資料の考証結果を発表しました。公募研究では、「楽譜資料の調査を中心とした無声期の映画館と音楽の研究」が精力的な成果発信を行いながら、当館所蔵の楽譜資料をSPレコードの考察を活かして和洋合奏で演奏する参考上映を行いました。また「演劇博物館所蔵の映画館資料に関する複合的カタログ化」は、経理書類等の映画興行資料を丹念に調査した成果を神戸映画資料館でのシンポジウムで発表し、国内外の研究者と討議しました。「視覚文化史における幻燈の位置」は国際シンポジウムを開催し、写し絵と錦影絵の復元上映を交えながら国内外の研究者と議論を重ねました。本年度新たに研究を開始した「中華民国期の伝統



国際シンポジウム登壇者 (2017年10月6日)
Speakers at the international symposium (October 6, 2017)

演劇資料から見る劇場と劇種に関する研究」も、短い研究期間にもかかわらず中国の他の劇場番付との比較考証を進めて国内外の研究会で資料考証の成果報告を行いました。

また本年度が2年目となる機能強化事業では、昨年度の成果を引き継ぎながらこれを着実に発展させることができました。①「海外大学との連携と人材育成」事業では、蜷川幸雄のシェイクスピア演出をめぐる、バーミンガム大学シェイクスピア研究所での講演会と在英日本国大使館での国際シンポジウムを開催し、昨年から続く同研究所との協力関係を一層強固なものとししました。また、昨年度の本拠点の事業成果である「伊藤道郎関連資料データベース」の公開を記念した国際シンポジウムも開催し、伊藤道郎の弟子・遺族・研究者を交えて多角的にこのデータベースやこの研究分野の意義を討議しました。②「『くずし字OCR』を活用した総合的古典籍データベースの構築」事業では、公開データの蓄積と公開方法の刷新を図りつつ、この意義を学会や他団体によるシンポジウムで報告しました。また、③「歌舞伎・人形浄瑠璃関係雑誌のデジタルアーカイブの構築」事業では昨年度に続き歌舞伎雑誌『新演藝』の残る7年分のデジタル公開作業を、④「演劇映像関連資料のデジタル化と共有化」では伊藤道郎関連資料のスクラップブック12冊、さらには飯島正等によるテレビ台本のデジタル公開作業を進め、資料のデジタル化による新たな研究環境の整備も図っています。

今後も演劇博物館の研究資料の利活用を進め、演劇学・映像学の研究環境を整えながらこの発展に寄与して参りたいと思います。

contents

■拠点代表あいさつ	1 p
■特色ある共同研究拠点の整備推進事業 機能強化支援	2 p
■平成29(2017)年度 共同研究活動報告	6 p
■平成29(2017)年度 テーマ研究成果報告	8 p
■平成29(2017)年度 公募研究成果報告	9 p
■Mission and Vision	13 p
■Report on support projects for enhancing function, fiscal 2017	14 p
■Report on the activities of the joint research teams, fiscal 2017	18 p
■Report on principal research findings, fiscal 2017	20 p
■Report on selected research findings, fiscal 2017	21 p

文科省の機能強化支援を受けて昨年度始まった本事業では、海外大学との連携・人材育成と資料のデジタル化による研究環境の整備とを進めることで国内外の演劇・映像研究の発展に寄与することを狙い、4種の事業を推進しています。

■ 海外大学との連携と人材育成 ■

世界的に知られる優れた演劇関連の研究機関との連携により海外への発信力の強化と若手人材の育成を進める「海外大学との連携と人材育成」事業では、2つの国際シンポジウムの開催と若手研究者の育成事業を行った。

○英国における国際シンポジウム「蜷川マクベスをめぐって」と公開研究会の開催

昨年から続くバーミンガム大学附属シェイクスピア研究所との協力関係を強化すべく、10月にロンドンで蜷川幸雄追悼公演「NINAGAWA・マクベス」が行われるのを機に、蜷川シェイクスピアをめぐり講演会と国際シンポジウムをイギリスで開催した。まずバーミンガム大学附属シェイクスピア研究所で開催された講演会（10月5日）では、児玉竜一副館長の講演「『蜷川マクベス』と日本の古典演劇」および山口宏子氏（朝日新聞記者）の講演「蜷川幸雄」のなかで、歌舞伎化されたシェイクスピア作品、蜷川マクベスにおける歌舞伎や女形の問題、劇場の内外を繋ぐような蜷川演出の特徴をめぐり考察が示された。講演の後には80名を超える参加者を交えて活発な質疑応答が行われた。

次いで在英日本国大使館で開催された国際シンポジウム「蜷川シェイクスピアをめぐって」（10月6日）では約100名の聴衆を集め、日英の専門家を交えて複数の視点から議論を行った。第1部「蜷川幸雄の功績を振り返って」では、シェイクスピア研究を牽引するマイケル・ドブソン氏（シェイクスピア研究所所長）、英国演劇界を代表する劇評家のマイケル・ビルントン氏、気鋭の演出家フィリップ・ブリン氏、若手研究者のロザリンド・フィールディング氏（バーミンガム大学大学院）が登壇した。各登壇者の実体験に基づ



拠点活動の報告（柴田）
Report on key activities (Kotaro Shibata)

いた様々な対話が行われ、日本の演劇に対するイメージを刷新したという1985年の「NINAGAWAマクベス」英国公演時の話題から、蜷川作品のもつ東西を繋ぐ折衷性、また古典と現代性の両方を踏まえた蜷川シェイクスピアの特徴まで、様々な観点から英国での蜷川受容をめぐって議論が交わされた。

続いて本拠点の柴田康太郎研究助手による「演劇博物館とシェイクスピア」において、演劇博物館とシェイクスピアの関係や関連資料の紹介がなされ、さらに第2部「歌舞伎女形とシェイクスピア」では、「NINAGAWAマクベス」で2015年の再演時より魔女を演じている歌舞伎女形の中村京蔵氏を招き、児玉副館長を聞き手として、厳しい蜷川演出の現場の逸話から蜷川演出を継承することの意義や可能性まで多岐にわたる対話が行われた。

なお、英国滞在中は東洋アフリカ研究学院（SOAS）、グローブ座等の在英の様々な研究機関・文化機関と意見交換を行い、今後の連携の大きな足がかりを作ることができた。



マイケル・ドブソン氏、マイケル・ビルントン氏、フィリップ・ブリン氏、
ロザリンド・フィールディング氏（左より）
Dobson, Billington, Breen, and Fielding



中村京蔵氏
Kyozo Nakamura

○国際シンポジウム「世界を駆け抜けた舞踊家 伊藤道郎—記憶・資料・研究」の開催

11月11日には、昨年度の本拠点の事業成果である「伊藤道郎関連資料データベース」の公開を記念し、国際シンポジウム「世界を駆け抜けた舞踊家 伊藤道郎—記憶・資料・研究」（小野記念講堂）を開催した。戦前にイギリス、アメリカで活躍し、戦後には日本で目覚ましい活動を行った伊藤道郎の多岐にわたる活動をめぐって、弟子・遺族・研究者が多角的な視点から討議を行った。

第1部「伊藤道郎の資料と記憶」ではまず、柴田康太郎は「演劇博物館の伊藤道郎関連資料データベース」において、本事業の紹介とデータベース化の意義について発表した。次いで伊藤道郎の義姪・伊藤慶子氏と直弟子の井村恭子氏による「伊藤道郎の生涯とメソッド」では、伊藤氏より遺族所蔵の写真スライドを使った伊藤道郎の生涯の紹介がなされ、次いで井村氏より直弟子の故古荘妙子らの映像を交えて伊藤道郎のメソッド「テン・ジェスチャ」、及びこれを応用した伊藤作品が紹介され、独特のメソッドをもつ伊藤作品の特徴が指摘された。こうした日本国内での伊藤作



ミシェル・イトウ氏
Michele Ito

品の継承の紹介に次いで、伊藤道郎実孫のミシェル・イトウ氏による「伊藤道雄の遺産を保存すること」においては、アメリカでの伊藤作品の継承状況が報告され、長らくアメリ

カで活躍した伊藤の記憶が同地で継承・更新されていることが明らかにされた。

第2部「伊藤道郎研究の現在」では、日米の伊藤道郎研究者による最新の知見が発表



ジャン・マリー・コウウェル氏
Marie-Jean Cowell

された。武石みどり氏（東京音楽大学）の発表「舞踊家伊藤道郎の出発点—ロンドンからニューヨークへ」では、ロンドンとニューヨークという2都市それぞれでの固有の受容の文脈を踏まえた伊藤の活動のあり方が明らかにされた。柳下恵美氏（早稲田大学）の「伊藤道郎の国際的芸術活動—東西文化の架け橋を目指して」では、アメリカと日本での伊藤道郎の国際的な活動が多面的に検証された。さらにメリー・ジーン・コウウェル氏（セントルイス・ワシントン大学）の発表「現代のダンス界における伊藤道郎とその作品の継続的意義」では、アメリカのダンス界や舞踊教育のなかで伊藤道郎のダンスメソッドが今なお保持する現代的意義が指摘された。

これまで資料不足からも研究が進まずにきた伊藤道郎をめぐり、本シンポジウムでは極めて多角的な議論がなされた。このシンポジウムを通して、「伊藤道郎関連資料データベース」のような一次資料のデジタル化とその公開が伊藤道郎研究に更なる多元的な視点をもたらすこと、またこれをもとにして国内外の研究者が議論を交わすことが、同分野の研究を国際的に活性化する可能性が示唆された。



質疑応答風景

Shibata, K. Ito, Imura, Takeishi, Yagishita, M. Ito, (an interpreter,) Cowell

○若手研究者海外派遣事業

本年度も全国から若手研究者を広く公募し海外での研究発表を促す事業を進め、Dance Studies Association設立大会で研究発表を行う北原まり子氏（早稲田大学文学研究科／パリ第八大学舞踊研究コース）に旅費を助成した。

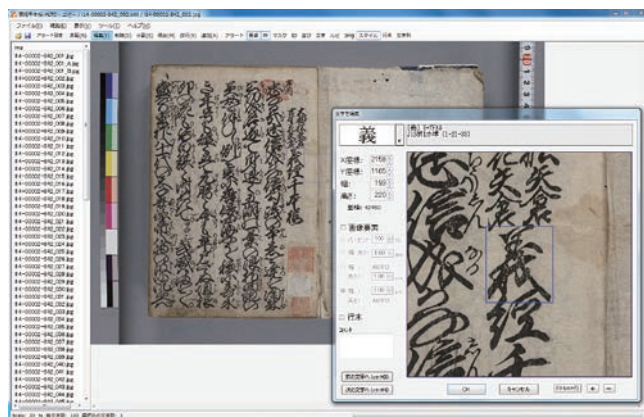
【報告：北原まり子】2017年10月19日（木）～22日（日）にオハイオ州立大学で開かれた国際研究大会「Transmissions and Traces: Rendering Dance」に参加し、

研究発表「ミハイル・フォーキンが最初にイザドラ・ダンカンの踊りをみたのはいつか—歴史的未解決問題の再検討」を行った。アメリカ拠点の二大舞踊学会SDHSとCORDがDance Studies Associationに統合された記念回で、世界各地より500名近い参加者があった。また、ニューヨーク公立図書館にて、フォーキンの晩年に撮られた作品映像を中心に調査を行った。

「くずし字OCR」を活用した総合的古典籍データベースの構築

本事業では、「くずし字OCR」技術を利用して演劇関係の古典籍をめぐる新たな研究環境の構築を目指し、くずし字で書かれた歌舞伎関係の古典籍資料を、直感的な操作で翻刻テキストとともに閲覧できるビューアで公開する試みを進めている。本年度はまず、昨年度の事業成果を当拠点のウェブサイト内「くずし字判読支援事業」のページで公開し、このビューアによる歌舞伎資料の閲覧を通じてくずし字の判読支援事業を推進した。

さらに本年度は、このページで閲覧できる資料の拡充を図り、新たに浄瑠璃丸本1件（「義経千本桜」100丁）、顔見世番付6件、役割番付6件のデータを作成し、公開作業を進めた。しかしたんに公開データを増やすだけでなく作業方法についても新たな試みを行った。既存の翻刻テキストがある浄瑠璃丸本については、データ作成作業を学生に依頼し、この作業自体がもつ判読学習上の効果を検証した。学生に対しては原典資料と翻刻テキストを対照してデータを作成する作業と専門家による校正データの反映の両方を依頼し、最終的にこの作業全体が学生の判読学習に十分な効果をもつことが分かった。また、翻刻テキストのない歌舞伎番付（顔見世番付、役割番付）はデータの作成段階から専門家に依頼し、未翻刻の番付資料の翻刻を進めながら作業を進めることにより、データ作成作業の効率的な

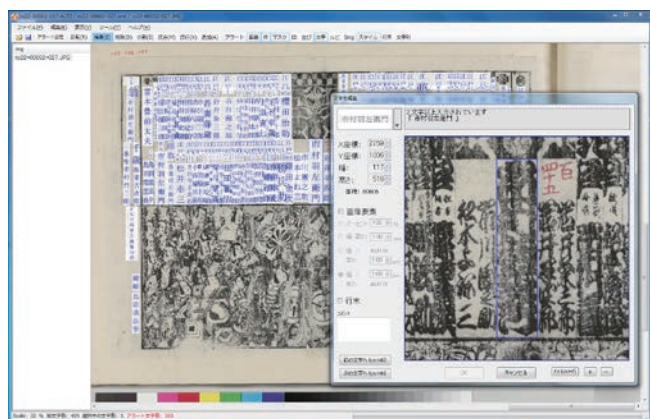


くずし字翻刻データ入力作業画面（丸本）
Transcribing kuzushiji (kazomise banzuke)

方法のあり方を検証した。

また、成果発信のあり方についても新たな道を模索した。まず閲覧上の利便性を高めるため、古典籍資料の閲覧と個々のくずし字データセットとの往還をしやすくするハイライト表示を可能とすることで、閲覧環境の更新に着手した。また、字形データセットを「早稲田大学文化資源データベース」にも収めることで本事業の成果の利活用の幅を広げるとともに、2018年に90周年を迎えてリニューアルされる演劇博物館の常設展示でも、本事業の成果を閲覧できる端末を設置し、一般の来場者にも広く成果の発信を進めた。

さらに、判読支援事業の幅を広げつつその意義を問い直すべく、本年度は事業成果を他の研究機関・団体へ発信することをも進めた。デジタル文化財創出機構主催のシンポジウム「デジタル文化財の未来」（11月29日、六本木アカデミーヒルズ）では児玉副館長が発表「資料のデジタル化と演劇の研究—くずし字OCRの活用と演劇博物館の試み」を、歌舞伎学会主催のシンポジウム「デジタル時代の歌舞伎研究」（12月10日、早稲田大学）では、柴田研究助手がデモンストレーション「くずし字OCRの可能性」を行った。他の事業との関連のなかで本拠点の事業を再検証することで、今後のさらなる展開を模索している。

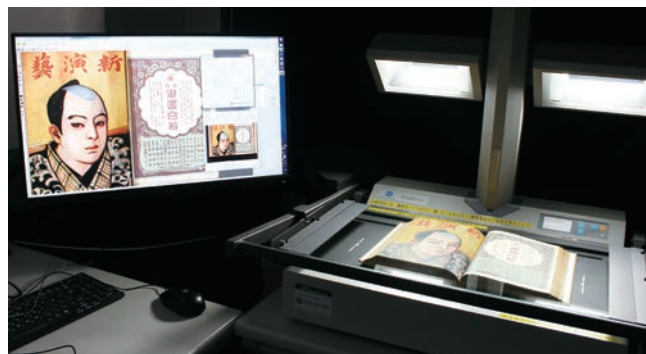


くずし字翻刻データ入力作業画面（番付）
Transcribing kuzushiji (maruhon)

歌舞伎・人形浄瑠璃関係雑誌のデジタルアーカイブの構築

演劇博物館は質的にも量的にも極めて豊かな演劇雑誌を所蔵している。本事業ではこうした貴重な演劇雑誌の資料保存と閲覧便宜の向上を併せて試み、資料のデジタル化とその館内公開を進めている。今年度は昨年度に続き、歌舞伎雑誌『新演藝』の1918～1925年分のデジタル公開用データを作成した。また、このデジタル化に併せて資料の劣化状況を点検して、一部資料については補修を行い、デジタルデータによる閲覧環境の充実化と、丁寧な資料保存を両立させた。さらに、これまでの本事業の雑誌・冊子資料のデジタル化作業資料のなかで培われた、資料を傷めずにデジタル化を進める工夫を踏まえ、昨年度選定した『演藝画報』や『オペラ』の資料の劣化状況を再調査し、来年度のデジタル公開作業を準備した。貴重な演劇資料のデジタル公

開により演劇博物館所蔵資料の利活用の幅が広がり、演劇研究がさらに活性化することを期待したい。



『新演藝』デジタル化風景
Digitization of Shin Engei

演劇映像関連資料のデジタル化と共有化

本事業では、演劇博物館の保管する映像資料、及び演劇博物館が多数所蔵する紙資料のデジタル化と公開を進めることで、貴重な演劇・映像資料の共有化を進めている。

○伊藤道郎関連資料の公開

本年度は、昨年度の成果である「伊藤道郎関連資料データベース」の拡充を図り、12冊のスクラップブックのデジタルデータによる館内公開作業を行った。この資料は伊藤道郎のアメリカ時代以後の新聞・雑誌記事、パンフレットなどの膨大な資料を収めたもので、彼の活動を具体的に検証するうえで極めて重要な資料群である。本事業によってスクラップ内の1400項目を超える量の多岐にわたる資料の目録が作成されたことで、膨大な資料群の検索が可能となり、昨年度の成果として公開した写真アルバムと併せて横断検索もできるようになった。デジタル公開によって2種類の研究資源の可能性を飛躍的に高めることで、伊藤道郎をめぐる研究環境の刷新を図った。

○草創期テレビ台本のデジタル化

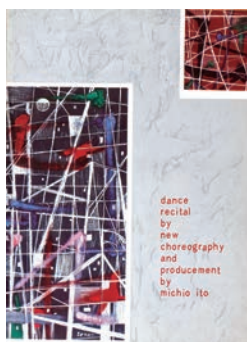
本事業でも昨年度に続き、館内公開するデジタルデータ

を拡充すべく、新たにテレビ台本のデジタル化を行った。今年度は演劇人である坪内逍遙や坪内士行に関連するテレビ台本（『マクベス』『真夏の夜の夢』『役の行者』等）、著名な映画評論家で草創期のテレビでも活躍した飯島正によるテレビ台本（『帰って来た人』等）、さらには映画監督の小津安二郎によるテレビ台本『青春放課後』のデジタル化と公開作業を進めた。草創期のテレビ作品と既存の演劇や映画などの隣接ジャンルとの関係を捉えるうえでも極めて貴重な資料群であり、こうした境界事例に改めて光を当てること、テレビ研究、演劇研究、映画研究の全体を活性化させることを企図した。

○演劇博物館所蔵の映像資料のデジタル化

本年度は演劇博物館が所蔵する貴重な映像資料のなかから8mmビデオの映像資料などとともに、現存未確認の映画作品『乃木将軍』の35mmフィルムのデジタル化を行った。これはトーキー映画として作られながらサイレント映画に再編集された貴重なバージョンのフィルムである。これらは今後の利活用とさらなる研究が期待される資料である。

（柴田康太郎）



パンフレット（伊藤道郎スクラップブック添付資料）
Pamphlet (from Michio Ito's scrapbook)



『青春放課後』資料
Scripts related to Seishun hokago

平成29年度は各共同研究チームが精力的に成果発表を行った。以下では各チームの代表的な催しを取り上げ、研究活動の一端を紹介します。

テーマ研究1 坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究

本研究チームによる坪内逍遙・士行関係の未公開資料の調査・研究の成果報告会を開催した。水田佳穂氏の発表「坪内士行と新劇一宝塚国民座をめぐる」は、大阪を拠点とした大正年間の士行の新劇活動を辿り、宝塚国民座(大正15年～昭和5年)の興行史を提示した。柳澤和子氏の発表「逍遙宛小泉八雲書簡について」は、初公開を含む逍遙宛八雲英文書簡5通と八雲宛逍遙書簡を対照させて「逍遙日記」を分析し、約半年間の逍遙八雲の親密な交流を再現した。松山薫氏の発表「書簡に見る逍遙と画家との交流」は、逍遙の出版や上演に関わった画家の中から簗木清方、和田英作、八木淳一郎の未公開逍遙宛書簡を紹介し、各人と逍遙の関係を明らかにするとともに、逍遙の業績中での絵画の果たした役割を論じた。小島智章氏の発表「御霊文楽座の逍遙一大正十一年近松二百年祭大阪行」は、逍遙

日記、三田村鳶魚日記、新聞記事等で逍遙の大阪訪問時の動向を辿り、既存の逍遙書誌未収録の観劇談を紹介して逍遙と文楽・義太夫節との関わりについて考察した。発表後には兄玉竜一副館長から各発表への意見が示され、議論が深められた。



柳澤和子氏による発表
Presentation by Kazuko Yanagisawa

公募研究1 楽譜資料の調査を中心とした無声期の映画館と音楽の研究

本研究チームは、本年度特に多くの催しを行い、シンポジウム「映画音楽とコンピュータ・テクノロジー」(4月29日、東京藝術大学)、若手研究者発表会「1920年代の映画館楽士と楽譜」(7月15日、おもちゃ映画ミュージアム)、研究会「映画説明レコード分析」(9月11日、拠点会議室)、公開研究会「無声期の映画館における和洋合奏一楽譜資料「ヒラノ・コレクション」とSPレコード」(1月13日、小野記念講堂)を開催した。

1月の公開研究会では、シンポジウムと和洋合奏付で無声映画『忠次旅日記』の参考上映を併せて行なった。第1部のシンポジウムでは、まず柴田康太郎の発表「時代劇伴奏における折衷性」、白井史人の発表「ヒラノ・コレクションからみる場面別表現と邦楽器」、紙屋牧子の発表「無声期日本映画の「尖端」と映画館における語り・音楽」が行われた。次いで活動写真弁士の片岡一郎による『忠次旅日記』に関するSPレコードの音源紹介、邦楽演奏家の堅田喜三代による音源中の邦楽にかんする解説が

なされ、最後にアーロン・ジェロー教授のコメントにより、各発表が映画史研究のより広い文脈のなかで捉え直され、この研究会の意義が再解釈された。第2部では、第1部での分析を踏まえた『忠次旅日記』の参考上映がなされた。演劇博物館所蔵の無声映画の楽譜資料「ヒラノ・コレクション」から採られた楽曲が和洋合奏によって演奏されるとともに、SPレコードに聞かれた鳴物の実践が併せて実現された。SPレコードの参照や伝統的な邦楽の型を組み合わせる試みによって、この楽譜の再現演奏と上映のあり方において新たな可能性が開拓された。

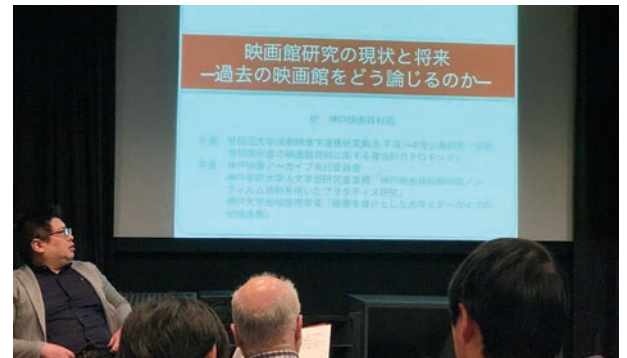


シンポジウム風景(白井氏、柴田氏、紙屋氏、片岡氏、堅田氏、ジェロー氏)
Shirai, Shibata, Kamiya, Kataoka, Katada, and Gerow

公募研究2 演劇博物館所蔵の映画館資料に関する複合的カタログニング

2017年11月12日に神戸映画資料館においてシンポジウム「映画館研究の現状と将来—過去の映画館をどう論じるのか」を開催した。まず研究代表者の上田学氏が開催趣旨および共同研究概要を紹介した。続く第一部「映画館に関する歴史的研究の方法」では上田が司会を務め、研究分担者の仁井田千絵氏が発表「東京の映画館にみられる近代性—関東大震災から日劇開場まで」を、同じく近藤和都氏が発表「戦ふ映画館」—戦時下日本の上映環境をめぐる」を行い、映画館興行に関する詳細な歴史研究を提示した。さらに第二部「神戸の映画館に関する研究の現状」では、研究分担者の板倉史明准氏が司会を担当し、田中晋平氏が発表「神戸映画館マップ」の作成状況と課題」を、吉原大志氏が発表「トーキー移行期の神戸新開地における映画館の労働と争議」を行い、神戸という一都市における映画館に関して考察がなされた。最後に行われたパネル・ディスカッ

ション「映画研究における映画館とは何か」では、これまでの登壇者に加えて研究分担者のスザンネ・シェアマン氏、同じくローランド・ドメーニグ氏、研究協力者のチョン・ジョンファ氏が登壇し、来場者も交えて多岐にわたる議論が行われた。



上田学氏による発表
Presentation by Manabu Ueda

公募研究4 視覚文化史における幻燈の位置

2017年12月17日に早稲田大学文化構想学部表象メディア論系との共催で、国際シンポジウム「日本のスクリーン・プラクティス再考—視覚文化史における写し絵・錦影絵・幻燈文化」を開催した。前半は開催趣旨説明に続き、まず大久保遼・向後恵里子、遠藤みゆき、上田学の各氏が演劇博物館所蔵の写し絵・幻燈資料に基づく研究成果や今後の方向性を報告した。次に草原真知子氏の基調報告「日本の幻燈文化の再検討」では多彩な資料を交えて幻燈と同時代の様々な視覚文化とのメディア横断的な関係が詳述された。最後にエルキ・フータモ氏の基調報告「Screenology—Toward a Media Archaeology of Projected Image」では氏の提唱する「スクリーン学 Screenology」の解説と今後の構想報告がなされた。後半では、劇団みんわ座の山形文雄氏の解説と写し絵「だるま夜話」「葛の葉」の上演、池田光恵氏の解説と錦影絵池田組による「花輪車」の上演が行なわれた。最後にフータモ氏、草原氏が加わり、パネル・ディスカッション「日本のスクリーン・プラクティス」が

行なわれ、西欧の映像文化と比較した際の写し絵や錦影絵の特徴、失われた過去の映像文化を現在において振り返る意義、スクリーン学やメディア考古学的視点の可能性が議論され、来場者との質疑応答も活発に行われた。



左より 山形氏、池田氏、フータモ氏、草原氏
Yamagata, Ikeda, Huhtamo, and Kusahara

公募研究5 中華民国期の伝統演劇資料から見る劇場と劇種に関する研究

本研究チームは1年という短い研究期間にもかかわらず丹念に調査を進め、中国現代演劇研究会の第14回研究会では、研究代表者の鈴木直子氏が当館所蔵の民国期の番付資料の紹介と天津の遊芸場に関する報告を行った。研究会では当館所蔵の大判ポスターについて

も紹介がなされ、用途や製作目的についての意見交換を通して、これが他機関にも見られない資料であることが確認された。議論のなかでは、番付の目録作成時に他機関との連携が取りやすかたちについても助言が提示された。

テーマ研究

1

坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究

研究代表者：濱口久仁子（立教大学異文化コミュニケーション学部兼任講師）

研究分担者：菊池明（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、小島智章（武蔵野美術大学非常勤講師）、松山薫（早稲田大学教育総合科学学術院非常勤講師）、水田佳穂（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、柳澤和子（早稲田大学教育総合科学学術院非常勤講師）

【研究目的】

本研究では、いまだ未整理状態にある逍遙宛て書簡全点の目録化を完了させるとともに、『坪内逍遙書簡集』に関連する書簡を中心として、順次、翻刻公開する予定である。逍遙宛書簡の整理、翻刻・研究は、『坪内逍遙書簡集』収録の年代未詳書簡の年代推定や、往復書簡としての内容研究を可能にし、逍遙の活動や当時の背景、交流において新たな側面を明らかにするものと期待され、現在進行中の「逍遙日記」再校訂にも資するものと思われる。

また、本研究を機に調査に着手した士行資料は、近年その多彩な演劇活動への評価が高まっている人物の資料として公開が待たれており、原稿、台本、チラシ、書簡、写真から、戦前の新文芸協会や宝塚新劇団の計画、宝塚や東宝での新劇活動、戦後の日本舞踊の評論といった、近代日本演劇史・舞踊史における士行の業績がより具体的に明らかになるものと期待される。

【研究成果の概要】

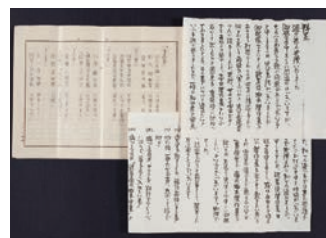
○坪内逍遙資料

今年度も坪内逍遙宛未整理書簡の整理及び仮目録作成作業を進め、42名56通、逍遙自筆メモ・旧蔵書類等46件のデジタル撮影を完了し、新たに「坪内逍遙作上演劇 材料貼込帖」全16冊214丁（内収録書簡は35名43通）を撮影した。逍遙宛書簡は、中條百合子・吉江喬松・五世中村福助書簡等119通の翻刻を終えた。また渥美清太郎・鎬木清方・小泉八雲の書簡計25通に詳細な註を施して「演劇研究」41号に掲載する（小島・松山・柳澤「坪内逍遙宛諸家書簡3」坪内逍遙宛渥美清太郎・鎬木清方・小泉八雲書簡）。今回掲載分は、渥美が逍遙と共同編集した『歌舞伎脚本傑作集』『大南北全集』刊行の過程（作品の選定や資料収集・校訂作業の苦勞、刊行に関わる経済的な事情など）、逍遙の舞踊劇革新のための第一作である『新曲浦島』の装丁を清方が担当した経緯、八雲が早稲田大学講師として逍遙と出会い、日本の演劇を紹介したいと助言を求めた交流の様子を明らかにする初公開の書簡である。清

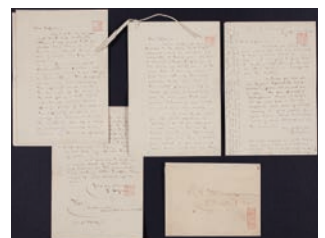
方と八雲の書簡、また逍遙と義太夫節の関わりについては当チームの成果報告会（10月27日於1号館310教室）にて報告（松山・柳澤・小島）を行った。

○坪内士行資料

20箱のうち2箱分にあたる、戦前の上演関係資料約473点の仮目録を作成し、デジタル化を済ませた。これまで資料的限界から顧みられることの少なかった、大正10年から13年の戯曲研究会および芸術協会、大正15年から昭和5年の宝塚国民座といった、士行の大正昭和初期の新劇活動がより明らかになった。関西在住の早稲田の卒業生をはじめとする文化人に支えられた戯曲研究会（芸術協会）は、講演、朗読会、茶話会と回を重ね、会員制の無料興行を催したが、関西の新劇上演としても早い段階であろうこの、案内状、香盤がほぼ揃い、上演年表を作成した。宝塚国民座についても同様に年表を作成したが、これについては当チームの成果報告会（10月27日於1号館310教室）にて報告（水田「坪内士行と新劇一宝塚国民座をめぐる一」）を行った。



坪内逍遙宛渥美清太郎書簡
大正13年8月28日
Seitaro Atsumi's letters
addressed to Shoyo Tsubouchi
August 28, 1924



坪内逍遙宛小泉八雲書簡
明治37年6月4日～9月15日
Yakumo Koizumi's letters
addressed to Shoyo Tsubouchi
June 4-September 15, 1904



芸術協会、第一回試演、大正12年5月26日～28日、
於新町演舞場、「功名」
Geijutsu Kyokai, First performance, 26-28 May 1923,
"Komyo" [Feat], Shinmachi Enbujo

公募研究は審査を経た研究計画に基づく複数の共同研究プロジェクトにより構成され、演劇博物館の収集品の有効利用を目指すものです。プロジェクトに対し、本拠点は共同研究の場と資料を提供します。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は本ニューズレター編集時のものであり、現在のものとは異なる場合があります。

公募研究

1

楽譜資料の調査を中心とした無声期の映画館と音楽の研究

研究代表者：長木誠司（東京大学大学院総合文化研究科教授）

研究分担者：紙屋牧子（東京国立近代美術館フィルムセンター特定研究員）、白井史人（日本学術振興会特別研究員）、山上揚平（東京藝術大学音楽学部非常勤講師）

【研究目的】

早稲田大学演劇博物館が所蔵する無声映画伴奏譜「ヒラノ・コレクション」（約800点）を中心に、大正～昭和初期の無声映画の伴奏音楽を、上演・興行形態の変遷を踏まえて明らかにすることが本研究の目的である。平成28年度までの楽譜資料の基礎調査と参考演奏・上映の成果に基づき、歌舞伎などの先行する舞台芸術や、同時代の和洋合奏や邦楽器の演奏、さらに海外における実践などへと視野を広げ、楽譜資料の発展的な分析と活用を進める。

【研究成果の概要】

○目録の整備とデジタル化

昨年度までに作成した目録に基づき、楽曲内容に踏み込んだ考証に基づいて主要パートと分蔵パートの照合を進め、目録の整備を進展させた。日活系列の映画館に配給されたと考えられる曲集『Kino Music 日活楽譜』の旋律データベース（約140点）を作成し、照合作業や資料活用の円滑化を図った。

○映画説明レコード音源の調査

楽譜資料を考証するための関連資料として、弁士の語りとともに伴奏音楽が収められたSPレコードの収集と試験的なデジタル化を進めた。音楽評論家・毛利眞人氏と活動写真弁士・片岡一郎氏を招いた公開研究会（9月11日）では、両氏が所蔵する貴重な音源の比較分析を行った。特に映画『忠次旅日記』（1927）に関連する映画説明レコードについて、選曲法・演奏法とともに楽譜に残らないお囃子に関する考証を進めた。

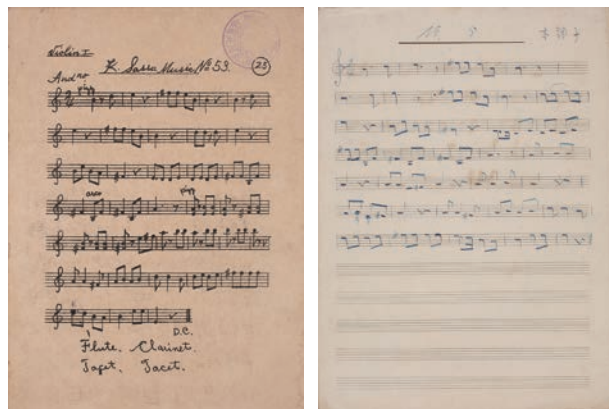
○邦楽演奏に関する意見交換と参考演奏

尺八奏者の志村哲氏（大阪芸術大学）に、本コレクションで確認できる唯一の尺八譜の試験演奏を依頼し、演奏法に応じた様々な活用可能性の説明を受けた。また邦楽の鳴物演奏家の堅田喜三代氏にSPレコードに録音されているお囃子の考証を依頼し、『忠次旅日記』の

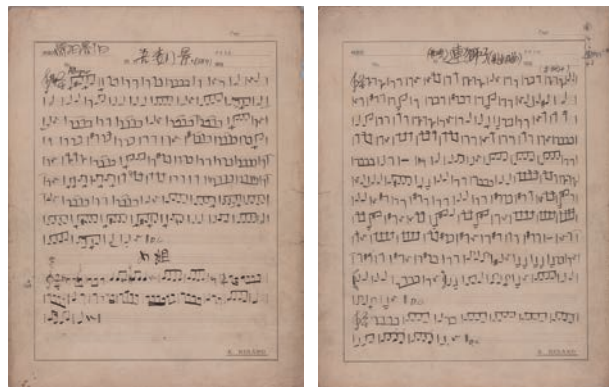
参考上映での演奏に反映させた（2018年1月13日、於早稲田大学）。

○内外の学術コミュニティとの意見交換

日本音楽学会支部横断企画（4月29日）、おもちゃ映画ミュージアム若手研究者発表会（7月15日）、また映画音楽を専門とする国際学会 *Music & The Moving Image* にて研究発表を行った（白井、5月27日、於ニューヨーク大）。さらに公開研究会での柴田康太郎（演劇博物館）、白井、紙屋による発表と、日本の無声映画研究を牽引するアーロン・ジェロー氏（イェール大）からのコメントを通して、内外の最新の研究動向を踏まえて研究成果を検討した（2018年1月13日）。



『Kino Music 日活楽譜』《K. Sassa Music No. 53》
左：ピアノ〔主要パート、簡易印刷〕 右：三味線〔分蔵パート、手稿〕
“K. Sassa Music No. 53” from *Kino Music Nikkatsu Gakufu*
(Violin part and separately kept part of shamisen)



ヒラノ選曲譜『照る日曇る日』（監督：高橋寿康、1926-1927年）
Handwritten compiled score by Hirano for Teruhi kumoruhi (1926-1927)

演劇博物館所蔵の映画館資料に関する複合的カタログニング

研究代表者：上田学（神戸学院大学人文学部准教授）

研究分担者：スザンネ・シェアマン（明治大学法学部教授）、ローランド・ドメーニグ（明治学院大学文学部准教授）、板倉史明（神戸大学大学院国際文化科学研究科准教授）、仁井田千絵（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、近藤和都（日本学術振興会特別研究員）

【研究目的】

本研究の目的は、日本における映画館・映画興行資料の基盤的研究を構築するために、演劇博物館が所蔵する「映画館興行関連資料」等を中心に共同調査を進め、日本映画史における映画館の機能を明らかにすることにある。興行関連の非公刊のノン・フィルム資料は、既存のフィルム・アーカイブ等において保存の対象になりにくく、分析すべき一次資料の整理調査が不足している。そのため、本研究は演劇博物館が所蔵する複数の一次資料を研究対象とし、その興行内容に踏み込んだ複合的なカタログニングを進める。

【研究成果の概要】

今年度は、第一に、昨年度に引き続き、演劇博物館所蔵の「映画館興行関連資料」のデジタル化を実施し、新たに資料92点のデジタル静止画作成を完了した。現在は、観客数、経費、売上、上映作品等の映画興行のデータを抽出し、カタログニングを進行中である。あわせて「京都松竹座戦時映画館資料」「東宝映画・市川事務監督・朝鮮配給所経営館視察資料」についても、デジタル静止画の作成とカタログニングを進め、その共有と分析のために研究会を開催した。その過程で近藤和都によって、戦時中の映画興行資料の現存の背景に、税制上の問題が存在していたことが明らかにされた。また昨年度と同様、資料に記載の映画作品について、『日本映画作品事典』『舶来キネマ作品事典』（科学書院）にもとづく作品番号を付与し、将来的な「映画館プログラム・データベース」との統合に向けて準備した。

第二に、神戸映画資料館においてシンポジウム「映画館研究の現状と将来—過去の映画館をどう論じるか—」を開催した。シンポジウムでは、まず上田学が開催趣旨および共同研究概要を紹介した。続く第一部「映画館に関する歴史的研究の方法」では上田が司会を務め、仁井田千絵が発表「東京の映画館にみられる近代性：関東大震災から日劇開場まで」を、近藤和都が発表「戦時下の映画館——戦時下日本の上映環境をめぐって」をおこなった。さらに第二部「神戸の映画館に関する研究の現状」では、板倉史明が司会を担当し、外部から田中晋平

（神戸映画保存ネットワーク）および吉原大志（歴史資料ネットワーク）を招いて神戸の映画館に関する発表をおこなった。最後に、発表者に加えて、スザンネ・シェアマン、ローランド・ドメーニグ、チョン・ジョンファ（韓国映像資料院）を交えたパネルディスカッション「映画研究における映画館とは何か」をおこない、来場者とも議論を重ねて、シンポジウムを終えた。

第三に、アウトリーチ活動として、明治大学リバティアカデミーにおいて、上田、近藤、仁井田、ドメーニグ、シェアマンによる映画館をテーマとした連続講座「映画が娯楽の王様だったころ」（6月10日～7月8日）を開催した。

映画館	上映作品	観客数	売上	経費	利益
松竹座	3112	207850	348222		
松竹座	4111	186745	1212771		
京映	1941	102012	210576		
文化	3227	111851	56210		
演映	1422	44305	162797		
ニュース		36800	376860		
昭和館	227	26346	162797		
京洛	1420	24280	28061		
長久座	210	11800	111390		
京都座	1420		345775		

京都松竹各座上帳（1942年12月）

Kyoto Shochiku sales book in the box offices (December 1942)

公募研究

4

視覚文化史における幻燈の位置：明治・大正期における 幻燈スライドと諸視覚文化のインターメディアルな影響関係にかんする研究

研究代表者：大久保遼（愛知大学文学部人文社会学科特任助教）

研究分担者：草原真知子（早稲田大学文学学術院教授）、向後恵理子（明星大学人文学部准教授）、遠藤みゆき（東京都写真美術館学芸員）

【研究目的】

本共同研究チームは、2016年度までに演劇博物館に所蔵されている幻燈スライドのコレクションの体系的な整理を行い、その成果を展示や図録、データベースなどによって公開・共有を行ってきた。2017年度はこうした成果を踏まえ、演劇博物館所蔵の幻燈資料を同時代の販売目録や、館内外に所蔵されている関連資料と突き合わせることで、明治・大正期の幻燈文化の広がり、同時代の視覚文化とのメディア横断的な影響関係を明らかにすることを目的とした。

【研究成果の概要】

○2017年度の研究成果の概要

2017年度の共同研究では、昨年度写真撮影を行った演劇博物館・早稲田大学中央図書館、および草原真知子氏所蔵の幻燈の販売目録のデータの分析を継続し、題目や年代等の情報を館蔵スライド資料と対照し分析を行った。また館内に所蔵されている錦絵や歌舞伎の番付など関連する視覚資料、また館外に所蔵されている幻燈と同時期の関連する視覚文化の資料も比較検討することで、館内の幻燈スライドの詳細と同時代の視覚文化との影響関係の把握に努めてきた。

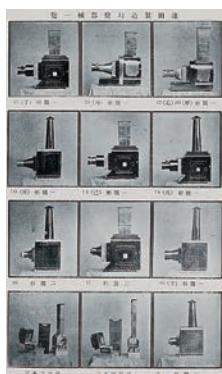
その成果については、主に次の2つの国際会議において報告を行った。

○国際会議 A Million Pictures での報告

2017年8月29日から9月1日にかけてユトレヒト大学で開催されたマジック・ランタンについての国際会議「A Million Pictures: History, Archiving, and Creative Re-use of Educational Magic Lantern Slides」に参加し、共同研究から草原真知子、遠藤みゆきの両氏が演劇博物館所蔵のスライドや関連資料を用いた研究報告を行った。同会議はヨーロッパにおけるマジック・ランタン研究と利活用の拠点となっており、日本の幻燈文化や本拠点での活動を国際的な場で紹介する機会となった。

○国際シンポジウム「日本のスクリーン・プラクティス再考」

2017年12月17日に早稲田大学において、成果報告を兼ねた国際シンポジウム「日本のスクリーン・プラクティス再考：視覚文化史における写し絵・錦影絵・幻燈文化」を開催した。前半では2016年度から2017年度の共同研究の取り組みの紹介と、館蔵の幻燈スライドを活用した研究成果について報告を行うとともに、草原真知子氏、エルキ・フータモ氏から国内外の幻燈、マジック・ランタンの研究動向について報告していただいた。後半では、劇団みんな座による写し絵の上演と山形文雄氏による解説、錦影絵池田組による錦影絵の上演と池田光恵氏による解説を受け、草原氏、フータモ氏を交えたパネルディスカッションを行なった。シンポジウム全体を通じて、国際的な視覚文化・映像史の研究動向の中で、日本の写し絵・錦影絵・幻燈文化の特徴、今後の研究の方向性や課題が明らかにされた。

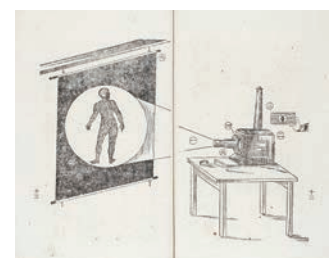
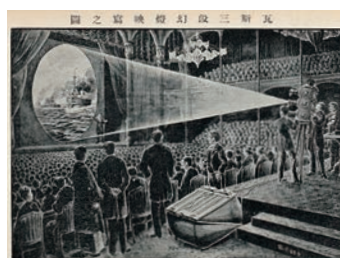


池田都楽「幻燈器械映画定価表」
掲載の幻燈機
Tsurubuchi Hatsuzo's
Catalogue and Price List of
Magic Lanterns and Slides



鶴淵幻燈舗「教育學術幻燈器械及映画定価表」
(左) 幻燈機 Magic Lanterns (右) 幻燈投影図

Tsurubuchi Lantern Company Catalogue and Price List of
Magic Lanterns and Slides for Science and Education



鶴淵初蔵「幻燈及映画定価表」
Ikeda Toraku's Catalogue and
Price List of Magic Lanterns
and Slides

中華民国期の伝統演劇資料から見る劇場と劇種に関する研究

研究代表者：鈴木直子（立教大学ランゲージセンター教育講師）

研究分担者：波多野真矢（早稲田大学商学部非常勤講師）

【研究目的】

中華民国期の劇場番付49点についての調査・整理を行い、それに基づき研究代表者と研究分担者が各専門分野に関連した研究を進める。番付の場所や人物、劇種等の情報から、伝統演劇、新劇、映画という各ジャンルの接点や興行の形態、推移等各自の研究に関連した成果が期待できる。番付そのものの価値の確認と、民国期の伝統演劇や周辺ジャンルとの関連性を具体的に解明することを目的とする。

【研究成果の概要】

民国期の番付資料49点の中で、寄贈資料が11点あり、そのうち6点が日本舞踊の舞踊家若柳柳湖氏からのものである。若柳氏は昭和初期に中国に留学しており、この時期に描いた京劇の隈取も演博に収められている。戯単は天津や北京、大連、上海の物だが北方の物が多い。また早稲田大学で教鞭を執っていた実藤恵秀氏寄贈の戯単が1点あり、これは1926年8月の北京の梅蘭芳出演の物。同年の梅蘭芳の訪日公演に関係する物と推測される。他4点は寄贈者不明で上海、天津、青島の物である。

戯単の劇場の所在地は北京、天津、大連、上海、青島の5地点で、劇場は以下の通りである。

北京…昇平茶園、開明戲院

上海…天蟾舞台

大連…永善舞台

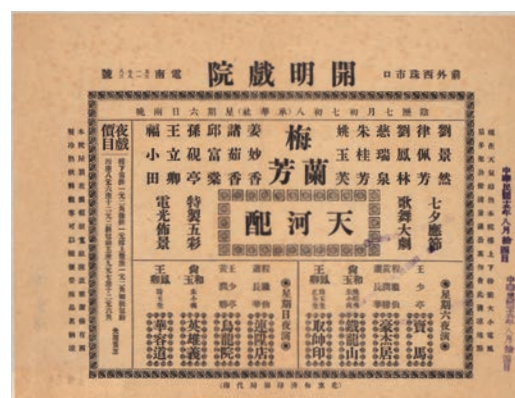
青島…新新大舞台

天津…張園遊芸場、大羅天遊芸場、大舞台、新明大戲院、丹桂茶園、第一舞台、新欣大戲院、明星大戲院

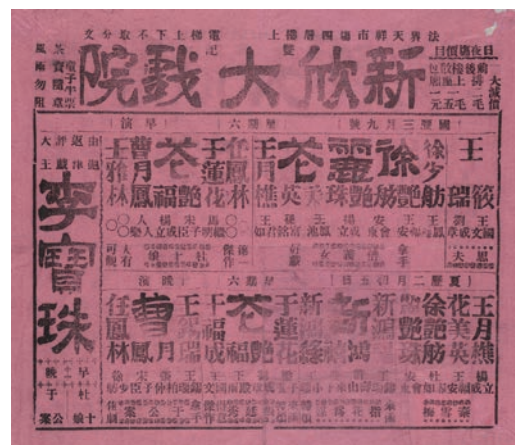
天津の劇場の戯単が多く、特に天津の遊芸場については従来あまり知られておらず、研究する者も少ないため、調査を進めている。張園遊芸場は1915年に清代の両湖統制張彪が建てた邸宅。日本租界の宮島街（現和平区鞍山道59号）に位置した。1923年張彪が広東商人彭某と協力し敷地内に北安利広東餐館、劇場、曲芸場、露天映画場やビリヤード場を開設した。戯単は1923年6月の物と年不明の6月、7月の物がある。啓智社文明新劇、電影、魔術、樹徳社大戯が主な演目。土日には花火の打ち上げがあったことが分かる。（後に

魔術は演目から消失）大羅天遊芸場は1917年に広東人蔡紹基が出資し、日本租界の宮島街（現和平区鞍山道）と明石街（現山西路）の交差した地を買い取り、遊芸場を開業した。9400m²、ガーデン式の総合遊芸場であった。遊芸場内には劇場、露天映画場、雑技劇場（曲芸やマジック等）、鹿園、野獣の部屋（狼や熊、猿等）を併設したが、1925年に雑技劇場は閉業。遊芸場の演目から、文明新戯や初期の映画との関連性も見出せる。

伝統演劇の公演番付は、評劇、河北梆子がある他はすべて京劇で、国内でこれまでに確認されている番付との重複がなく、地域も年代も従前の不足を補うという意味で貴重である。梅蘭芳、劉漢臣、尚和玉、孫菊仙、楊慧儂などの著名な俳優の名前が見られ、新たな上演の足跡が確認できる。その他、女優劇団のもの、女優・男優の共演など多種の形態で上演されていたことも確認される。



1926年8月14日の北京・開明戲院での梅蘭芳出演戯単
August 14, 1926, Mei Lanfang's performance
at the Kaiming xiyuan in Beijing



1935年3月9日の天津・新欣大戲院での評劇公演戯単
March 9, 1935, Ping opera performance xidan
from the Xinxin daxiyuan in Tianjin



Mission and Vision

Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Minako Okamuro

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, which is managed by the Theatre Museum, was established in 2009 after being accredited as a joint usage/research center by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). We were reaccredited in 2014, and since then, we have pursued a joint research program, which is based on an investigation of the unreleased materials owned by the museum. Having obtained a MEXT grant for *Tokushoku aru Kyodo Kenkyu Kyoten no Seibi Suishin Jigyo: Kino Kyoka Shien* ("a Scheme to 'Promote the Maintenance of Distinguished Joint Research Centers': Support for Enhancing Function") in 2016, we have advanced into a new program.

2017 was the second year in which the joint research teams compiled their findings. The teams made presentations of these, while also pressing on with the task of preparing a detailed catalog compilation, based on expert documentary research. Regarding the principal research project "Basic Research Survey of Materials Relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi," the team presented the results of their examination of letters addressed to Shoyo Tsubouchi as well as the investigation of the vast collection of materials related to Shiko Tsubouchi.

Regarding the publicly selected research project "Research on Movie Theater and Music during the Silent Era, Based Mainly on Studying Musical Score Materials," the team not only communicated their findings in a thorough manner, but, based on their examination of SP records, they also organized a referential screening of a film in which the museum's music score materials were played in a Western-Japanese ensemble format. The team undertaking the research project "Linking Data Catalogs of Movie Theater and Exhibition Materials Owned by the Theatre Museum" made a presentation at the symposium of the Kobe Planet Film Archive, in which they reported the results of their painstaking survey of film business-related materials, such as accounting documents, and discussed these with researchers from Japan and abroad. As for the research project "Reconsidering the Magic Lantern in the History of Visual Culture," the team held an international symposium in which they discussed the topic with researchers from Japan and abroad while viewing reconstructed magic lantern displays via *utsushi-e* and *nishiki kage-e* projectors. In 2017, we have taken up a new research project: "Selected Research 5: A Study of Traditional Chinese Opera Theaters

and Genres of Plays: An Overview of Programs in the Republic of China." Despite the short research period, the team made great progress in comparing their materials with other Chinese theater playbills, and they reported the findings from their analysis at research conferences in Japan and abroad.

2017 also marked the second year of the "Support for Enhancing Function" program. We made steady progress in this program, building on the achievements of the previous year. Regarding the first project of the program "Collaboration with Overseas Universities and Fostering Next Generation," we organized a lecture meeting at the University of Birmingham's Shakespeare Institute and an international symposium at the Embassy of Japan in the UK where we discussed Yukio Ninagawa's Shakespeare productions. These events were an opportunity to strengthen our collaboration with the Shakespeare Institute. We also held an international symposium to commemorate the release of the "Database of Materials Related to Michio Ito," which was one of the research project achievements of 2016. At the symposium, disciples, descendants, and scholars of Michio Ito engaged in multi-dimensional discussions on the significance of the database and research in this field.

Regarding the second project "Development of Comprehensive Database of Pre-modern Books by Using *Kuzushiji* (characters in cursive style) OCR Technology," we improved the availability of *kuzushiji* data and refined the way to view this online. We also communicated the significance of this endeavor to other academic associations and organizations at symposiums. For the third project, "Building of Digital Archives of *Kabuki* and *Ningyo joruri*-related Magazines," we built on the effort of 2016 and worked on developing a digital archive of the remaining seven years' worth of content of the kabuki magazine *Shin Engei*. As for the fourth and final project, "Digitization and Sharing of Theater and Film-related Materials," we made progress in preparing a digital archive and added 12 scrap books of Michio Ito and early-era television scripts written by Tadashi Iijima. Through such digitization work, we are aiming to develop a new research environment.

We will continue to encourage access to and utilization of the museum's materials and, thereby, enhance the research environment for theater and film studies. In this way, we hope to contribute to the development of this research area.

Scheme to Promote the Maintenance of Distinguished Joint Research Center — Support for Enhancing Function

Having obtained a MEXT grant for the “Support for Enhancing Function” program, we are aiming to contribute to the development of theater and film studies through collaborating with overseas universities, fostering the next generation, and digitally archiving our materials so as to enhance the research environment. To this end, we are pursuing four projects.

Collaboration with Overseas Universities and Fostering Next Generation

The first project, “Collaboration with Overseas Universities and Fostering Next Generation,” involves partnering with world-renowned theater institutes to improve the way we communicate our research on a world stage. It also involves fostering the next generation of researchers. Accordingly, we participated in two international symposia and organized a program for dispatching young researchers.

UK International Symposium “Ninagawa Shakespeare: A Memorial Symposium” and Open Seminar

The Ninagawa Company staged a commemorative production of *NINAGAWA Macbeth* at London’s Barbican Centre in October 2017. Taking this production as an opportunity to deepen the collaborative partnership we began with the University of Birmingham’s Shakespeare Institute, we organized a seminar and international symposium on Ninagawa’s Shakespeare productions in Britain. During the seminar at the Shakespeare Institute on October 5, Ryuichi Kodama presented “*Ninagawa Macbeth* and Japanese Classical Theater” and Hiroko Yamaguchi of *Asahi Shimbun* presented “Yukio Ninagawa.” They discussed kabuki adaptations of Shakespeare works, the kabuki-esque elements in Ninagawa’s *Macbeth*, including the matter of *onnagata* (male actors who play female roles), and some of the distinctive features of the productions, such as the linkage of the inside with the outside of the theaters. Approximately 80 people attended the seminar, and an engaging Q&A session was held at the end.

Following this seminar, the international symposium “Ninagawa Shakespeare: A Memorial Symposium” was held at the Embassy of Japan in the UK on October 6. Approximately 100 people attended the symposium, and British and Japanese experts exchanged a wide range of ideas and opinions. The first part of the symposium, “Ninagawa Remembered,” featured four speakers: Professor Michael Dobson (Director of the Shakespeare Institute), a leading Shakespearean scholar; Michael Billington, one of the UK’s leading theater critics; Philip Breen, the spirited theater director; and Rosalind Fielding, an up-and-coming Shakespearean scholar. They discussed various topics

regarding how Ninagawa is received in Britain: recollections on *Macbeth* in 1985, which renewed the image of Japanese theaters in the UK, Ninagawa’s syncretic nature that links the East and the West and the classical and the modern, and so on.

Then Kotaro Shibata delivered a speech on “The Tsubouchi Memorial Theatre Museum and Shakespeare” in which he introduced the Theatre Museum, its relationship with Shakespeare, and the materials related to him. After this speech, the symposium moved to its second part: an interview session titled “A Kabuki Onnagata and Shakespeare.” In this, Professor Kodama conversed with Kyozo Nakamura, a kabuki actor who played one of the witches in the Barbican production of *NINAGAWA Macbeth*, on a range of topics, including memories from the rehearsal sessions with the director who was known to be strict, the personal experience of performing in the productions, and the significance and possibility of passing on these productions to successive generations.

During their stay in the UK, our team held discussions with British research and cultural institutes, such as SOAS University of London and the Globe Theatre, thereby, providing an important foothold for deepening our collaboration in the future.

International Symposium “Border-Crossing Dancer Michio Ito: His Memories, Materials and Research”

On November 11, 2017, we conducted an international symposium on “Border-Crossing Dancer Michio Ito: His Memories, Materials and Research” (held in the Ono Auditorium) to commemorate the release of the “Database of Materials Related to Michio Ito,” which is one of the project outcomes of the previous year. At the symposium, disciples, descendants, and scholars of Michio Ito engaged in multi-dimensional discussions about his pre-war activities in Britain and America and his remarkable post-war career in Japan.

The first part of the symposium was titled “Memories and Materials of Michio Ito.” Kotaro Shibata’s talk, “The Materials of Michio Ito in The Tsubouchi Memorial Theatre

Museum Digital Archive Collection,” introduced our project, and he discussed the significance of developing a digital database of materials related to the dancer-choreographer. In the next lecture, “Introduction to Michio Ito and his Works and Methods,” Keiko Ito, Ito’s niece-in-law, spoke about her uncle’s life and displayed photographs from her family archives. Further, Kyoko Imura, Ito’s direct disciple, presented films of Taeko Furusho et al. to illustrate the dancer-choreographer’s “Ten Gestures,” introduced the works in which these gestures were applied, and outlined the unique method that characterized his productions. While Imura discussed the intergenerational handover of Ito’s works in Japan, the next speaker, Michele Ito, Ito’s biological grandson, described how his works have been handed down in America and how the memories of Ito—who had spent many years in America—have been transmitted and updated in the country.

The second part of the symposium, “Recent Studies of Michio Ito,” featured presentations in which scholars reported their latest findings. In her lecture, “The Starting

Point of Dancer Michio Ito: From London to New York,” Midori Takeishi outlined the dancer-choreographer’s career in the West, focusing on his activities in London and New York. Emi Yagishita’s talk on “Michio Ito’s International Artistic Activities: Establishing a Cultural Bridge Between East and West” multifacetedly analyzed his international activities in the U.S. and Japan. Marie-Jean Cowell presented “The Ongoing Significance of Michio Ito and His Work in the Contemporary Dance Landscape” in which she highlighted the significance that his dance method continues to enjoy in contemporary American dance and dance instruction.

In the past, research on Michio Ito has been hampered by a lack of materials, but the participants at the symposium exchanged a truly diverse array of perspectives. This symposium showed the significance of digitizing and releasing primary materials, as we have done with our database of materials related to Michio Ito, and its potential to bring in a greater range of perspectives and facilitate a richer exchange of these ideas between scholars in Japan and abroad to help the discipline flourish at a global level.

Dispatching Young Researchers Abroad Program

In 2017, we continued to encourage young researchers throughout Japan to participate in overseas research presentations. As part of this effort, we partially funded Ms. Mariko Kitahara's trip to Ohio, USA, to deliver a presentation at the inaugural Dance Studies Association Conference titled "Transmissions and Traces: Rendering Dance" and hosted by the Ohio State University Department of Dance from October 19–22, 2017.

Kitahara delivered a presentation titled "When Did

Fokine First See Duncan Dancing?: Examining a Historical Problematic." Attended by 500 people from around the world, the conference was held to commemorate the merging of two key American dance organizations, the Society of Dance History Scholars and the Congress on Research in Dance, into the Dance Studies Association. As well as attending the conference, Kitahara surveyed the photographic works of Fokine at the New York Public Library.

Developing a Comprehensive Database of Premodern Books Using Kuzushiji Optical Character Recognition (OCR) Technology

In this project, we aim to use *kuzushiji* OCR technology to construct a new environment for researching old materials related to the theater. To this end, we have been working on an open-access tool for viewing these materials. This tool is designed so that the user can view and navigate a digital facsimile of the manuscript, while simultaneously viewing superimposed transcribed characters, which are revealed intuitively upon using the cursor. In 2017, the fruits of the previous year's work went online on the *kuzushiji* viewer page of the project website. By making these kabuki texts available to view in this way, we have made progress in our endeavor to help researchers analyze *kuzushiji* texts.

With a view to making more content available for this tool this year, the team worked on digitally rendering one *yoruri maruhon* ("Yoshitsune Senbon Zakura," 100 two-pages spreads), six *kaomise banzuke*, and six *yakuwari banzuke*. However, we did not only increase the volume of data we made available through the viewer, but we also attempted to reform the work process. We assessed the potential of this work process for training students to read and decipher *kuzushiji* texts. To this end, we entrusted to a student the work of preparing the data for the *yoruri maruhon* text, a transcription of which already exists. We instructed the student to prepare the data by collating the original manuscript with the transcription, while incorporating the corrective feedback of experts. We concluded that the work process did indeed help the student to develop the ability to decipher the text. As for the *kaomise* / *yakuwari banzuke* texts, which had no transcription, we searched for an efficient work process for preparing the data, while

entrusting the data preparation work to experts, and proceeded with transcribing the texts.

We also pursued an effective way to communicate our accomplishments in 2017. To make the viewer more user-friendly, we started upgrading the viewing environment and provided a highlight function that makes it easier for the user to shift back and forth between viewing the manuscript and the transcribed characters. Additionally, to make it more widely accessible, we subsumed the data set of character figurations into *Cultural Resource Database* as well as put a terminal viewer in the permanent exhibition room of our Museum, which reopens in March 2018 to commemorate the 90th anniversary of its foundation.

Moreover, we started communicating our efforts to other institutes and organizations to broaden our endeavor to help researchers decipher texts and reassess the significance thereof. As part of this strategy, Ryuichi Kodama, director of the Theatre Museum, attended the symposium *The Future of Digital Cultural Assets 2017* (Roppongi Academy Hills, November 29) and delivered a lecture titled "Digitizing Materials and Researching Theatrical Productions: The Theatre Museum's Attempt to Utilize *Kuzushiji* OCR Technology." Also, Kotaro Shibata delivered a presentation titled "The Potential of *Kuzushiji* OCR Technology" at the Kabuki Association-hosted symposium "Kabuki Research in the Digital Age" (Waseda University, December 10). Through interchanges with other projects, we have been reexamining this project with a view of developing it further.

Building a Digital Archive for *Kabuki* and *Ningyo Joruri* Magazines

The Theatre Museum's collection of theater magazines is abundant, both qualitatively and quantitatively. In this project, we are attempting to preserve these precious materials as well as make it easier to access and view them. With this dual objective in mind, we are continuing with the work of digitizing the materials and making them available for viewing. Continuing our efforts from 2016, we created digital transcriptions of the 1918–1925 issues of the kabuki publication *Shin Engei*. Alongside this digitization process, we inspected the increasingly deteriorated materials and repaired some of them. In this way, we balanced the goal of enhancing access to the materials through digital

transcription with that of carefully preserving the physical materials. After digitizing many journals and pamphlets, we have developed strategies for digitizing content without harming the physical materials. Building on this knowhow, we reexamined the dilapidated state of the materials we selected last year—*Shin Engei* and *Opera*—and made preparations for launching the content online in 2018. We believe that digitizing these precious theater-related materials will expand the opportunities for accessing and applying the Theatre Museum's materials and, thus, enliven research in this area.

Digitization and Sharing of Theater and Film-related Materials

The aim of this project is to digitize the Theatre Museum's film materials and its many manuscripts with a view of sharing these precious primary materials.

Digital Archive of Materials Related to Michio Ito

In 2017, we aimed to expand and enhance the "Database of Materials Related to Michio Ito," which is a product of the previous year's research work. To this end, we worked on digitally archiving the materials, in particular, 12 scrap books of Michio Ito. These scrapbooks constitute more than 1400 items of vast data, including newspaper and magazine articles and pamphlets from Michio Ito's time in America. As such, they represent a precious resource to those seeking to examine the dancer-choreographer's activities in detail. By cataloguing these diverse scrapbooks, we have enabled researchers to search and navigate the vast content therein. One achievement from the previous year was to make content accessible along with released photograph albums, thus enabling researchers to peruse both photographic and textual content. We believe that these efforts will radically expand the possibilities of primary materials and lead to the innovation of the research environment.

Digitization of TV Scripts of the Early Period

Subsequent to our work in 2016, we made efforts to

expand and enhance the museum's digital database; in particular, we added television scripts to the digital archive. These included scripts which are based on the works of Shoyo and Shiko Tsubouchi (e.g., *Macbeth*, *A Midsummer Night's Dream*, *En no gyoja*), and scripts which are written by Tadashi Iijima (e.g., *Kaettekita hito*), who was a film critic and active in early-era television, and by film director Yasujiro Ozu (*Seishun hokago*). These scripts represent a precious resource to those seeking to ascertain the relationship between early-era television works and related genres, including theater and film. Shedding light on these boundary cases would accelerate television studies, theater studies, and cinema studies.

Digitization of Film- and Non-film Materials of the Theatre Museum

This year, we digitized some of the precious materials of motion pictures, including not only 8 mm video materials but also a 35 mm film *Nogi shogun*, which was considered to be lost. Interestingly, this surviving version has been re-edited as a silent film, though it was formerly produced as a sound film. These materials are expected to be utilized and contribute to further researches.

(Kotaro Shibata)

In 2017, the joint research teams compiled their findings and made their presentations. The following section introduces some of their activities.

Principal Research 1: Basic research survey of materials relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi

An event was held to report the findings of the examinations and research carried out by the collaborative research team on the unreleased materials about Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi. A presentation by Kaho Mizuta, “Shiko Tsubouchi and *Shingeki*: On Takarazuka Popular Theater (*Takarazuka Kokumin-za*)” follows the activities of Shiko, who was of the new school of Japanese drama (*Shingeki*) based in Osaka during the Taisho era, and discusses the history of performance in Takarazuka Popular Theater (1926 to 1930, Taisho 15 to Showa 5). A presentation by Kazuko Yanagisawa, “Letters to Shoyo from Yakumo Koizumi” contrasts five English letters written by Yakumo to Shoyo, some of which will be shown for the first time, with letters written to Yakumo by Shoyo, through an analysis of “Shoyo’s Diary,” and recreates the close relationship between Shoyo and Yakumo that spanned roughly half a year. A presentation by Kaoru Matsuyama, “Shoyo’s relationship with painters through

letters,” introduces yet-to-be-released letters addressed to Shoyo by painters who had been involved in his publications and performances: Kiyokata Kaburaki, Eisaku Wada, and Junichiro Yagi. It brings to light the relationship that Shoyo had with each of these people and discusses the role the paintings played in Shoyo’s achievements. A presentation by Tomoaki Kojima, “Goryo Bunrakuza’s Shoyo: Taisho 11 Chikamatsu Bicentennial Anniversary Osaka,” follows the movements of Shoyo during his visits to Osaka through “Shoyo’s Diary,” Engyo Mitamura’s Diary, and newspaper articles and discusses Shoyo’s involvement with Bunraku and Gidayu-bushi by introducing existing unreleased bibliographic records of Shoyo’s theater stories. After the presentations, the Waseda University Tsubouchi Memorial Theatre Museum Vice-Director Ryuichi Kodama commented on each of the presentations and discussed the topic further.

Selected Research 1: Research on Movie Theater and Music during the Silent Era Based on Musical Score Materials

In 2017, this research team held several events with remarkable outcomes. Events held include a symposium, “Film Music and Computer Technology” (April 19, Tokyo University of the Arts), a presentation, “Cinema Musicians and Musical Scores in the 1920s,” at a Young Researchers Forum (July 15, Toy Film Museum), a public meeting called “An Analysis of Movie Narrator Recordings” (September 11, based in the conference room), a symposium, “*Wayo-gasso* (Syncretic Ensemble Using Japanese and Western Instruments) During the Silent Film Era: Musical Score Materials ‘Hirano Collection’ and SP Records” (January 13, Ono Memorial Hall).

The January public event consisted of a symposium and a reference screening of *Chuji tabi nikki* (A Diary of Chuji’s Travels) with *wayo-gasso*. In the first part of the event, Kotaro Shibata presented “The Syncretism in Musical Accompaniment of *Jidaigeki* Films,” Fumito Shirai presented “Musical Topoi with Traditional Japanese Musical Instruments in the Hirano Collection,” and Makiko Kamiya presented “Benshi narrations and

Music about the ‘*Sentan* (Avant-garde)’ of Japanese Film and Cinemas in the Silent Era.” Next, the *katsudo-shashin benshi* (live narrator for silent film) Ichiro Kataoka introduced several movie narrator sound recordings from *Chuji tabi nikki*, and Kisayo Katada provided commentary on the Japanese classical music practices that were recorded on the sound source. Finally, Professor Aaron Gerow provided comments on each of the presentations and the entire first part of the event was reviewed. In the reference screening during part 2, a *wayo-gasso* incorporating Japanese classical music practices based on the SP record analysis introduced in the first part was presented. Starting in 2014, this research team carried out a study on the “Hirano Collection,” musical score materials for silent films owned by the Tsubouchi Memorial Theatre Museum; each year this musical score is performed and shown, but with the inclusion of *narimono* (Japanese drums and sound effects); this year’s *wayo-gasso* was the biggest yet.

Selected Research 2: A Linked Data Catalog of Movie Theater and Exhibition Materials Owned by the Theatre Museum

On Sunday November 12, 2017, a symposium called “The Current State and Future of Cinema Research: How to Talk about Cinemas in the Past” was held at the Kobe Planet Film Archive. First, research representative Manabu Ueda spoke of the symposium’s objectives and gave an outline of the collaborative research. Next, in part one, “Historical Cinema Research Methods” was presided by Ueda, and research member Chie Niita presented “Modernity in Tokyo Cinemas: From the Great Kanto Earthquake to the Opening of Nichigeki,” and Kazuto Kondo, a member, presented “‘Warring Cinema’: The Film Screening Environment of Japan During Wartime,” exhibiting detailed research on the cinema industry. Furthermore, in part two, Kobe cinema

was discussed, with “The Current State of Kobe Cinema Research” presided by research member Fumiaki Itakura, “The Development Status of and Challenges to the ‘Kobe Cinema Map’” presented by Shinpei Tanaka, and “Cinema Labor and Disputes Concerning Kobe Shinkaichi During the Transition Period to Talking Pictures” presented by Daishi Yoshihara. Finally, the symposium ended with the panel discussion “What is Cinema in Film Studies?” which included, in addition to the speakers, research members Susanne Schermann and Roland Domenig, and research collaborator Chung Chonghwa, with questions and comments from the audience.

Selected Research 4: To Reconsider the Magic Lantern in the History of Visual Culture

On December 17, 2017, the international symposium “Reconsidering Japanese Screen Practice: *Utsushi-e* and *nishiki kage-e*, and Magic Lantern culture in the History of Visual Culture” was jointly held with the School of Culture, Studies of Media, Body, and Image at Waseda University. The first half began with an explanation of the symposium’s objectives, which was followed by reports from Ryo Okubo, Eriko Kogo, Miyuki Endo, and Manabu Ueda on the results and future direction of the research based on the magic lantern material owned by the Theatre Museum. This was followed by a keynote address presented by Machiko Kusahara, “Reconsidering Japanese Magic Lantern Culture,” which brings together various materials and goes into depth about magic lanterns and various other facets of visual culture from the same era, as well as its relationship with transmedia. In the final keynote “Screenology: Toward a Media Archaeology of Projected Image,”

presenter Erkki Huhtamo offered a commentary on the proposed concept of “screenology” and gave a report on the future of its vision. The latter half of the symposium consisted of a commentary by Fumio Yamagata from Gekidan Minwaza and *utsushi-e* performances “Daruma Yobanashi” and “Kuzunoha,” a commentary by Mitsue Ikeda, and a performance of “Karinsha” by Nishiki Kage-e Ikeda-Gumi. The symposium ended with a panel discussion, “Japanese Screen Practice” conducted by four members, Machiko Kusahara, Erkki Huhtamo, Fumio Yamagata, and Mitsue Ikeda. The panel discussed the features of *utsushi-e* and *nishiki kage-e* as compared with screen image culture in the west, the significance of reflecting upon the vanished past of screen image culture today, and the possibilities of screenology and media-archaeological perspectives, with a lively Q&A session with the audience members.

Selected Research 5: A Study of Traditional Chinese Opera Theaters and Genres of Plays

This research project was carried out carefully even in its short one-year research period. At the 14th Modern Chinese Theater Kenkyukai, research representative Naoko Suzuki introduced the Republic of China-era program materials owned by the museum and spoke about entertainment venues in Tianjin. The large posters owned by the museum were also introduced,

and there was an exchange of views on their uses and production purposes, demonstrating that such materials would not be accessible in this way in any other organization. In the discussions, advice was offered on how cooperation with other institutions was easily achieved when the programs were catalogued.

○ Principal research

The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Institute, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members listed below were accurate at the time this newsletter was edited, but may have changed subsequently.

Principal research

1

Basic Research Survey of Materials Relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi

Principal Researcher: Kuniko Hamaguchi (Affiliated Lecturer, The College of Intercultural Communication, Rikkyo University)

Collaborative Researchers: Akira Kikuchi (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Tomoaki Kojima (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Kaoru Matsuyama (Part-time Lecturer, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University), Kaho Mizuta (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Kazuko Yanagisawa (Part-time Lecturer, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University).

Research objective

This research project aims to complete the cataloguing of all the letters addressed to Shoyo Tsubouchi that are yet to be sorted out. The project also plans to sequentially reprint and release these letters, with a focus on the letters connected to the “Collected Letters of Shoyo Tsubouchi.” The organization and reprinting of the letters, and research on the letters, make estimating the age of the undated letters found in the “Collected Letters of Shoyo Tsubouchi” possible, as well as research into the content of the letters seen as correspondence. This process will hopefully bring to light new aspects of Shoyo’s activities, as well as the context of the time and his relationships. This is regarded as a project that contributes to the revision of “Shoyo’s Diary,” on which progress is currently being made.

Moreover, the results of the examination of the Shiko Tsubouchi materials, which began as a part of this research project, are expected to be released. This examination involved materials that represent Shiko as an individual whose various theater activities have become increasingly recognized in recent years. It is anticipated that from the manuscripts, scripts, fliers, letters, and photos, Shiko’s achievements in modern Japanese theater and dance history will be brought to light in detail, including the prewar plans of *Shin Bungei Kyokai* (arts and literature societies) and *Takarazuka Shingekidan*, the *Shingeki* activities of Takarazuka and Toho, and critiques on postwar classical Japanese dance.

Summary of the research findings

○ Shoyo Tsubouchi-related materials

This year, progress was made in the organization and tentative cataloguing operations of the remaining unsorted letters addressed to Shoyo Tsubouchi. The digital scanning of 56 letters written by 42 people, as well as the 46 handwritten documents once belonging to Shoyo was also completed, and the “Collection of Materials on Shoyo Tsubouchi’s Theater Performances,” which contains 16 volumes and 214 pages 43 letters from 35 people was also scanned. With regard to reprinting letters addressed to Shoyo, 119 letters from people such as Yuriko Chujo, Takamatsu Yoshie, and Fukusuke Nakamura V were successfully reprinted. Furthermore, a total of 25 letters from Seitaro Atsumi, Kiyokata Kaburaki, and Yakumo Koizumi (Lafcadio Hearn) were annotated in detail and printed in *Engeki Kenkyu* No. 41 (“Reprint of the Letters sent to Shoyo

Tsubouchi” and “Reprint of the Letters sent by Seitaro Atsumi, Kiyokata Kaburaki, and Yakumo Koizumi to Shoyo Tsubouchi,” both compiled by Kojima, Matsuyama, and Yanagisawa). These letters are the first materials of their type released to the public. Atsumi’s letters reveal the process behind Atsumi and Shoyo’s co-edited publications, *Kabuki Kyakuhon Kessaku-shu* and *Dai Nanboku Zenshu*, including selecting the featured works, the difficulties involved in collecting and revising the material, the economic situation with regard to the publications, and other steps. Kiyokata’s letters reveal information about the binding of *Shinkyoku Urashima*, Shoyo’s first work toward the innovation of Japanese dance, for which Kiyokata was in charge of the binding. These letters also reveal the interactions between Yakumo, a Waseda University lecturer, and Shoyo, when Yakumo met Shoyo requesting advice about how to introduce Japanese theater abroad. The research team (Matsuyama, Yanagisawa, and Kojima) held an event to report the outcomes from Kiyokata and Yakumo’s letters and Shoyo’s discourse on *Gidayu-bushi*, (October 27, Building 1, Room 310).

○ Shiko Tsubouchi-related materials

Prewar performance-related materials from around two of 20 boxes were tentatively catalogued and digitized, totaling 473 items. More information was discovered on Shiko and his activities in the new school of Japanese drama (*Shingeki*) during the Taisho and early Showa periods, including the *Gikyoku Kenkyukai* (the drama studies association) and the *Geijutsu Kyokai* (arts societies) from 1921 to 1924 (Taisho 10-13), as well as the Takarazuka Popular Theater (*Takarazuka Kokumin-za*) from 1926 to 1930 (Taisho 15 to Showa 5). Until now, this information was given little attention due to the limited number of historical sources for it. The *Gikyoku Kenkyukai* (*Geijutsu Kyokai*), which was supported by cultural figures that included Waseda University graduates who lived in the Kansai area, held lectures, recitals, and tea parties, as well as free performances of *Shingeki* for members. Despite the fact that this occurred in the early stages of the Kansai, invitations and casting timelines were mostly set, and a chronological performance table was formulated. A similar chronological table was created for the *Takarazuka Kokumin-za*, and the team held a debriefing event to report on it (October 27, Building 1, Room 310) (Mizuta “Shiko Tsubouchi and Shingeki – On Takarazuka Kokumin-za”).

○ Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Institute provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members listed below were accurate at the time this newsletter was edited, but may have changed subsequently.

Selected research

1

Research on Movie Theater and Music during the Silent Era Based on Musical Score Materials

Principal Researcher: Seiji Choki (Professor, Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo)

Collaborative Researchers: Makiko Kamiya (Visiting Researcher, National Film Center, The National Museum of Modern Art, Tokyo), Fumito Shirai (JSPS Research Fellowship for Young Scientists), Yohei Yamakami (Part-time Lecturer, Faculty of Music, Tokyo University of the Arts)

Research objective

The objective of this study is to clarify the practice of providing accompaniment music for silent films in Japan from the mid-1920s to the early 1930s. To examine the changes in the performances and exhibition styles, this study investigates the "Hirano Collection," a collection of silent film musical score materials (approx. 800 items) preserved at the Tsubouchi Memorial Theatre Museum. Based on fundamental research into the musical scores and reference performances and screenings, occurring until 2016, that used these scores, the analysis and utilization of the musical scores is being advanced, as it relates to areas including preceding performing arts such as Kabuki, performances of *wayo-gasso* (a syncretic ensemble of Japanese and Western instruments), classical Japanese musical instruments from the same era, and the contemporary practices in movie theaters abroad.

Summary of the research findings

○ Cataloguing and digitization

Based on the catalogue that has been created up until 2016, a revised catalogue has since been refined. The main parts and separately kept parts of scores were verified, so the catalogue was consolidated according to the content of the compositions. A database, organized by opening melody, of the anthology *Kino Music Nikkatsu Gakufu*, which has been distributed to Nikkatsu exclusive theaters, was created in order to facilitate the verification processes and use of the materials.

○ Sound source examination of *benshi* narration recordings

As it was relevant to the study of the musical scores, short play (SP) records containing narration by *benshi* (live narrators at the silent movie theaters) and musical accompaniment were collected and partly digitized. At the September 11 public meeting attended by music critic Masato Mori and *benshi* Ichiro Kataoka, a comparative analysis was carried out for these valuable audio sources, which are owned by both Mori

and Kataoka. In particular, the compiling methods and performance methods in several movie narrator recordings for the movie *Chuji tabi nikki* (A Diary of Chuji's Travels, 1927) were studied, along with the *ohayashi* (accompaniment music and sound by Japanese traditional percussion), for which no musical score is preserved in the collection.

○ Discussions and reference performances related to Japanese classical music performance

In a presentation by a collaborative researcher, Shakuhachi player Satoshi Shimura (Osaka University of Arts) demonstrated how to perform a *shakuhachi* (Japanese traditional woodwind instrument) part from a score. Only a single musical piece in this collection contains a part for this instrument. Through this reference performance, Shimura suggested various possible techniques for performance. In addition, Kisayo Katada, a Japanese classical music *narimono* (drums and sound effects) performer, was asked to study the *ohayashi* that was recorded on the aforementioned SP record, a rendition of which was incorporated in the performance at the reference screening of *Chuji tabi nikki* (January 13, 2018, Waseda University).

○ Exchanging opinions with the internal and external science community

Research presentations were held at the Interregional Forum of Musicological Society of Japan (April 29, Tokyo), the Young Researchers Forum at the Toy Film Museum (July 15, Kyoto), and the international conference specializing in film music, Music & The Moving Image (Shirai, May 27, New York University). Furthermore, research outcomes by collaborative researchers, Shirai, Kamiya, and Kotaro Shibata (Theatre Museum), were discussed based on the latest research trends in Japan and overseas, through the commentary and discussions of Prof. Aaron Gerow (Yale University), a renowned researcher of Japanese silent film at a panel discussion (January 13, 2018).

A Linked Data Catalog of Movie Theater and Exhibition Materials Owned by the Theatre Museum

Principal Researcher: Manabu Ueda (Associate Professor, Faculty of Humanities, Kobe Gakuin University), Collaborative Researchers: Chie Niida (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Susanne Schermann (Professor, School of Law, Meiji University), Roland Domenig (Associate Professor, Faculty of Letters, Meiji Gakuin University), Kazuto Kondo (JSPS Research Fellowship for Young Scientists)

Research objective

The objective of this research project is to identify the functions of cinema in Japanese film history by focusing on collaborative research centering on data sources, such as materials related to movie theater exhibitions owned by the Waseda University Tsubouchi Memorial Theatre Museum, to develop basic research on Japanese cinema and film exhibition materials. As unpublished exhibition-related non-film material is unlikely to be preserved in existing film archives, organizational examination of the primary source material, which must be analyzed, is lacking. For this reason, this research project uses several primary source materials owned by the Theatre Museum to focus on the composite cataloguing of its in-depth exhibition content.

Summary of the research findings

First of all, this year continued last year's digitization of the Theatre Museum's materials related to movie theater showings, and achieved the completion of the creation of 92 digital stills from the materials. Currently, film exhibition data such as audience numbers, expenses, sales, and films screened is being extracted, and the cataloguing process is in progress. The creation of digital stills and the cataloguing of the "Kyoto Shochikuza wartime cinema materials" and the "Toho Co., supervisor Ichikawa, *chosen haikyūjo keieikan shisatsu* materials" are also being advanced, and meetings were held for analysis to discuss joint ownership and analysis. According to Kazuto Kondo, with regard to extant materials about wartime film showings, there exists a tax issue. As with last year, for the films mentioned in the materials, preparations

were made towards future integration with the Movie Theater Program Database. This will be accomplished by assigning movie numbers based on the "*Nihon Eiga Sakuhin Jiten*" (Encyclopedia of Japanese Movies) and the "*Hakurai Kinema Sakuhin Jiten*" (Encyclopedia of Imported Foreign Movies).

Second, a symposium called "The Present and Future of Cinema Research: Discussing Cinemas in the Past" was held at the Kobe Planet Film Archive. The symposium began with Manabu Ueda's introduction of the event's objectives and a collaborative research summary. The first part, "Historical Cinema Research Methods," which followed the introductions, began, with Ueda presiding, followed by Chie Niita's presentation "Modernity in Japanese Cinema: From the Great Kanto Earthquake to the Opening of Nichigeki," and "Warring Cinema': The Film Screening Environment of Japan during Wartime" presented by Kazuto Kondo. Next, part two involved presentations about Kobe cinema, with Fumiaki Itakura presiding. "The Current State of Kobe Cinema Research" was presented by guests Shimpei Tanaka (Kobe Film Preservation Network) and Daishi Yoshihara (Historical Data Network). Finally, the symposium ended with a panel discussion "What is Cinema in Film Studies?" attended by, in addition to the speakers, Susanne Schermann, Roland Domenig, and Chung Chonghwa (Korean Film Archive), which included questions and comments from the audience.

Third, as part of an outreach program, a lecture series on cinema, "When Cinema was the King of Entertainment," led by Ueda, Kondo, Niita, Domenig, and Schermann, was held at the Meiji University Liberty Academy (June 10 – July 8).

Reconsidering the Magic Lantern in the History of Visual Culture: A Study on the Intermedial Relationship between the Magic Lantern and Visual Cultures during the Meiji and Taisho Periods

Principal Researcher: Ryo Okubo (Project Research Associate, Faculty of Letters, Department of Humanities, Aichi University)

Collaborative Researchers: Machiko Kusahara (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University), Eriko Kogo (Associate Professor, Meisei University School of Humanities), Miyuki Endo (Curator, Tokyo Metropolitan Museum of Photography)

Research objective

The collaborative research team systematically organized the magic lantern slide collection owned by the Theatre Museum until 2016 and released and shared the results at exhibitions and in illustrated catalogues and databases. Based on the results, the magic lantern materials owned by the Theatre Museum were combined with related materials from the same era, such as sales catalogues and the museum's *ukiyo-e*. Overall, the research objective of the 2017 project was to bring to light the expansion of magic lantern culture in the Meiji and Taisho eras, and its mutually influential relationship with the visual culture of that time.

Summary of the research findings

2017 summary of research outcomes

Based on the digitalized data about the magic lanterns and slide catalogues owned by the Theatre Museum, Waseda University Library, and Machiko Kusahara, the collaborative research in 2017 involved the continuation of data analysis and a comparative analysis between the data in the catalogues, such as title or date of production, and the museum-owned slides. Moreover, by engaging in a comparative discussion on the visual materials owned by the museum, such as the *ukiyo-e* and kabuki programs, and the magic lantern and related visual cultural material from the same period not owned by the university, the mutual relationship between the details about the museum's magic lantern slides and the visual culture of the same era is better understood.

The results were reported at the following two international conferences.

International conference: A Million Pictures

Machiko Kusahara and Miyuki Endo reported their collaborative research findings using the Theatre

Museum slides and other related material at the international conference on magic lanterns, A Million Pictures: History, Archiving, and Creative Re-use of Educational Magic Lantern Slides, held at Utrecht University from August 29 to September 1, 2017. The conference is based on the research network of magic lantern research and its utilization in Europe, so it was a good opportunity to introduce Japanese magic lantern culture and activities into the world of international research.

International symposium: Reconsidering Japanese screen practice

On December 17, 2017, an international symposium called Reconsidering Japanese Screen Practice: *Utsushi-e* and *nishiki kage-e*, and Magic Lantern Culture in The History of Visual Culture was held at Waseda University. Research outcomes were reported at this symposium. The first half of the symposium consisted of introductions to the 2016-2017 collaborative research initiatives, presentations on the research findings of projects using magic lantern slides from the Theatre Museum, and presentations on both domestic and international research trends for magic lanterns, presented by Machiko Kusahara and Erkki Huhtamo. The second half consisted of *utsushi-e* lantern performances by the Minwaza Theater Company and commentary by Fumio Yamagata, a *nishiki kage-e* lantern show performance by the Nishiki Kage-e Ikeda-Gumi Theater Group and commentary by Mitsue Ikeda, as well as a panel discussion, which was joined by Kusahara and Huhtamo. Throughout the symposium, the characteristics of Japanese *utsushi-e*, *nishiki kage-e*, and magic lantern culture, and its future research direction, were clarified within the research trends of international visual culture and media history.

A Study of Traditional Chinese Opera Theaters and Genres of Plays: An Overview of Programs in the Republic of China

Principal Researcher: Naoko Suzuki (Adjunct Lecturer, Rikkyo University Language Center)

Collaborative Researchers: Maya Hatano (Part-time Lecturer, School of Commerce, Waseda University)

Research objective

A total of 49 Republic of China (ROC)-era theater programs were examined and organized, and based on this, research was conducted by research representatives and research members according to their respective specializations. Results related to the research of each respective field, such as program location and actors, can be anticipated from information such as the type of play, including traditional theater, modern theater, and cinema, and the point of contact for each of these genres, their performance styles, and the developments that came from them. The objective is to verify the value of the program itself, and to precisely uncover its link to ROC-era traditional theater and the surrounding genres.

Summary of the research findings

Of the ROC-era program materials, 11 were donated materials, and of these, six were donated by Japanese dancer Ryuko Wakayagi. Wakayagi studied abroad in China in the early Showa period, and the Peking opera Lianpu (臉譜) depictions from that time are kept at the Theater Museum. The programs (called Xidan) were from Tianjin, Beijing, Dalian, and Shanghai, but many were from the north. In addition, there is one that belonged to Mei Lanfang (梅蘭芳), a famous Peking opera artist from Beijing, in August 1926; this item was donated by Keishu Saneto, who taught at Waseda University. It can be surmised that this item is associated with Mei Lanfang's performance in Japan in the same year. The donors of the other four items are unknown. These items are from Shanghai, Tianjin, and Qingdao.

The Xidan theater locations were in Beijing, Tianjin, Dalian, Shanghai, and Qingdao, and the theaters are as follows:

- Beijing … Shengping Chayuan (昇平茶園), Kaiming Xiyuan (開明戲院)
- Shanghai … Tianchan Wutai (天蟾舞台)
- Dalian … Yongshan Wutai (永善舞台)
- Qingdao … Xinxin Dawutai (新新大舞台)
- Tianjin … Zhangyuan Youyichang (張園遊藝場), Daluotian Youyichang (大羅天遊藝場), Dawutai (大舞台), Xinming Daxiyuan (新明大戲院), Dangui Chayuan (丹桂茶園), Diyi Wutai (第一舞台), Xinxin Daxiyuan (新欣大戲院), Mingxing Daxiyuan (明星大戲院)

There exist many venues for theaters in Tianjin; in particular, amusement parks (Youyichang) in Tianjin, which have been largely unknown until now, are now being examined, as there has not been a lot of research in the area. Zhangyuan Youyichang (張園遊藝場) is a residence built by Governor Zhang Biao in the Qing Dynasty in 1915. It is located in the Japanese settlement of Miyajima street (now Hepingqu Anshandao 59). In 1923, Zhang Biao, in cooperation with a Cantonese merchant named Peng, opened Bei'anli Cantonese restaurant (北安利廣東餐館), a theater, a circus theater, an open-air movie theater, and a billiard room at the residence. The xidan is from June 1923 as well as June and July from an unknown year. The main program consisted of Qimingshe Wenming xinxi (啓民社文明新戲), cinema, magic shows, and Shudeshe daxi (樹德社大戲), and there were fireworks on the weekends. The magic show was later removed from the program. In 1917, Cai Shaoji an educational supervisor in Tianjin invested in Daluotian youyichang, bought the land that crossed over Miyajima street (Anshanlu now) and Akashi street (Shanxilu now) and opened an amusement park. At 9400m², it was a comprehensive amusement park with a garden. A theater, an open-air movie theater, a venue for Chinese folk style shows (circus, magic, etc.), a deer garden, and a room for wild animals (wolves, bears, monkeys, etc.) were set up, but in 1925, the venue for Chinese folk style shows was closed. From the amusement park program, associations can be found with Wenming xinxi (文明新戲, early modern theater) and early films.

Of the traditional theater performance programs, one is from Ping opera (評劇) and Hebei clapper (河北梆子), and the rest are from Peking opera, and with no overlap with the programs known thus far domestically, they are an invaluable supplement to the current material shortages with regard to region and period. The names of famous actors such as Mei Lanfang, Liu Hanchen (劉漢臣), Shang Heyu (尚和玉), Sun Juxian (孫菊仙), and Yang Huinong (楊慧儂) can be found, allowing for the discovery of the footprints of new performances. Additionally, various different performance styles were discovered, such as actress-only theater companies and performances in which female and male actors are co-stars.

編集：柴田康太郎 小松加奈

翻訳：カクタス・コミュニケーションズ株式会社

発行者：文部科学省「共同利用・共同研究拠点」

早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点

拠点代表：岡室美奈子

早稲田大学演劇映像学連携研究拠点

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学早稲田キャンパス6号館

TEL: 03-5286-1829 URL: <http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/>

Edited by: Kotaro Shibata, Kana Komatsu

Translated by: Cactus Communications

Published by: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan

"Joint Usage/Research Center", Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts,

Theatre Museum, Waseda University

Center Leader: Minako Okamuro

Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Waseda University

Building 6, Waseda Campus, Waseda University, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku,

Tokyo, 169-8050

(+81)3-5286-1829 URL: <http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/>